2024
10
No. 738

國學院大學学報

「熱闇に住む」
朝ゆふべながむる庭は
秋さびて、松かは毛むし
荒し過ぎたり
『倭をぐな』
釈　迢空

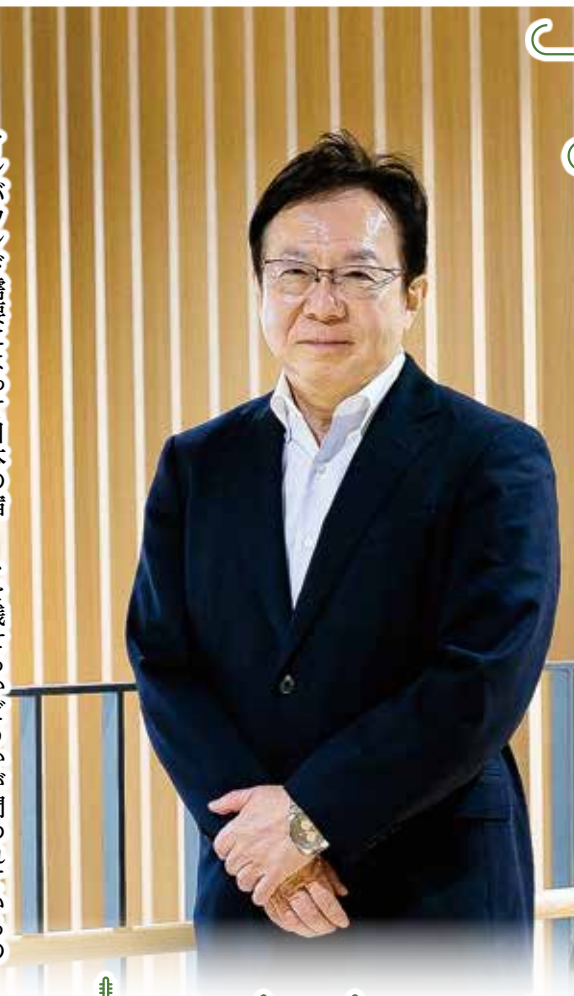
国学院大学　令和6年10月20日㈪　定期号（毎月20日発行）　1部20円
［発行］国学院大学　［編集］総合企画部広報課　〒150-8440 東京都渋谷区東四丁目10-28　［電話］03（5466）0130　［FAX］03(5466)0528

祭　儀　■ **創立記念祭**　11月1日（金）　午前10時　仮殿　■ **関係物故者慰霊祭**　11月1日（金）　午前11時　百周年記念館記念講堂

研究者に聞く

観光宿泊業から見た日本社会の未来

観光まちづくり学部・井門隆夫教授



インバウンド需要によって日本の宿泊業は安泰……とは、なかなかいかない。既に30年にもわたって、日本の宿泊業の大半を占める中小法人の労働生産性は上がらず、その行く末が懸念されている。

そうした中小の宿泊業こそ、地域社会の要であるはずだと考えているのが、井門隆夫・観光まちづくり学部教授だ。「資本（所有）」と「運営」を分離せよという、リアリティーに満ちた提案にまずは耳を傾けてみよう。社会や環境に配慮した投資や企業活動が重視されるようになってきた中、宿泊業もまた、社会にポジティブなインパクトを残せるかどうかが問われているのではないか。話の中で語られていくのは、宿泊業から見た日本社会の未来の話でもある。井門教授は、窮地に立たされている中小宿泊業の未来を、そうした世界的な潮流の中で捉えている。

日本の中小宿泊業の根本的な問題点にフォーカスしたその視点は、井門教授自身が旅行会社に身を置いて目の当たりにしてきた光景と結びついている。自身の歩みを踏まえながら、現在進行形で行われている地域社会の〝実験〟を紹介していく。

4・5面に関連記事

彬子女王殿下とともに学生らが稲刈り

コメ作りワークショップで日本文化に触れる

彬子女王殿下（前列右から4人目）と手作業で稲刈りを行った参加者ら

コメ作りの体験を通じ、日本の文化や歴史に触れる機会とする「新潟コメ作りワークショップ」の稲刈りが9月23日、新潟市北区で行われた。このワークショップは、彬子女王殿下が総裁を務められる一般社団法人心游舎が主催しており、これまで5月に田植え、7月に草取りを実施。今回は彬子女王殿下をはじめ、在学生11人と本学教職員、卒業生、協力農家の方や地元の方など約50人が参加した。

当日は、彬子女王殿下が最初の刈り取りをされた後に続く形で、地元の伝統的な農作業着に着替えた学生らが横一列になり丁寧に稲を刈り取った。刈り取った稲は、地元で「まるける」という藁を使い束ねる作業を経て、稲束にまとめられた。学生たちは初めての体験に苦戦していたが、農家の方にコツを教えてもらうと徐々に慣れ、田んぼには次々に稲束が積み重ねられていった。稲束はその後、天日干しのための柵である「はさ」に掛けられ、黄金色の穂が広がっていた。

稲刈り後の振り返り学習では、学生たちから「5月の田植え、7月の草取り、9月の稲刈りとコメ作りワークショップに参加し、自分で育てた稲を刈り取ることができ、とても貴重な機会になった」「日々コメ作りに労力をかけてくれる方々の存在をじかに感じ、おコメのありがたさを実感した」といった感想があがった。

今回収穫したコメは今後、東京大神宮へ奉納される予定。

みはるかすもの

酷暑の夏に届いた一枚の葉書。「残暑お見舞い申し上げます」から始まる手書きの文字を読み返しながら、差出人のことを思い出す。いかがお過ごしだろうか。そうして昨年までに届いた葉書の束に合わせ大切に保存する▼メール、LINEなどの各種SNSの利用が普及し、日常生活に不可欠で手軽なコミュニケーション手段となった今でも、手書きの葉書を手にしたときのうれしさは大きく温かい。また相手を想いながら、心を込めて葉書を手書きするときにはデジタルでは味わえない凛とした緊張感がある▼我が国最初の「官製はがき」が発行されたのは、郵便事業開始から2年後の明治6（1873）年12月1日。手紙よりも手軽で使い勝手のよい葉書は、日常生活の一部として急速に普及した。しかしそれも今は遠い昔となった▼10月1日から「通常はがき」の料金が63円から85円に値上げされた。定形郵便物や非定形郵便物の料金も同様だ。「今後とも、郵便サービスの安定的な提供を維持していくため」との理由だが、郵便物を出す方、そして受け取る方の両方にとってなんとも気が重いが、葉書がよりいっそうありがたく感じられるようになったと考えたい▼秋の夜長、葉書を前に筆を執り、大切な人に近況などを伝えられてはいかがだろうか。

主な内容　**2面**／狂言の会 笑いの中で奥深い「人間賛歌の芸」を堪能　**3面**／「指定寄付金」ご芳名　**4・5面**／なぜ日本の中小宿泊業の労働生産性が上がらないのか？
6面／パリ・オリンピック柔道日本代表に川上コーチが同行　日本代表から得た貴重な学び

最終面から　K：DNA　**Ⅰ面**／出雲駅伝 平林主将がアンカー勝負制し5年ぶり2度目の優勝　**Ⅱ面**／日本語の魅力を伝える日本語教師を目指す

大蔵流狂言　山本東次郎師「狂言の会」

笑いの中で奥深い「人間賛歌の芸」を堪能

「入間川」を披露する山本東次郎師（右）

日本の伝統芸能である狂言に親しんでもらおうと、人間国宝で院友の大蔵流狂言・四世山本東次郎師（昭36卒・69期文）一門による「狂言の会」が10月9、10日の両日にたまプラーザキャンパスで開かれた。25回目となる今年は昨年の12月開催から時期を移し、約650人が伝統芸能を味わった。

9日は午後の一般上演に先立ち、近隣の小学校5校から6年生約420人が招かれ、国語の教科書に掲載されている大蔵流の「柿山伏」を鑑賞した。上演後は狂言の姿勢や動作、発声方法などを舞台上で体験する場も設けられた。

一般上演では、東次郎師がシテ（主役）を務め、子離れできない親と親離れできない息子の関係を描く「二人袴」をはじめ、「因幡堂」「禰宜山伏」が演じられた。上演後に客席からの質問に答えた東次郎師は「せりふは謡、しぐさは舞」という山本家が守り続けている狂言の表現方法の基本を紹介。終わりに「餅酒」の謡が披露された。

10日は「入間川」「樋の酒」「福の神」の三つが上演された。「入間川」はシテの大名が、東次郎師演じるアド（脇役）の入間の何某に面目をつぶされ、その仕返しをもくろむという物語。物事を全て反対に言い表す「入間の逆言葉」を使った噛み合わない会話の滑稽さが見どころだった。最終演目の「福の神」では東次郎師がシテの福の神を務めた。アドの参詣人が「福は内へ」と豆をまくと、高笑いとともに福の神が姿を現す。舞台袖からも客席全体に響きわたる東次郎師の声の張りに、観客は圧倒された。

終演後の解説で東次郎師は狂言を「愚かしい心理劇」と表現。「人間の心の営みの愚かしさを知れば傲慢さが消え、謙虚になるかもしれない。争いがなくなるかもしれない。それが一回り二回りと広がれば世界が平和になるんじゃないかと思って狂言は作られた」と述べ、笑いの底にある〝人間賛歌の芸〟としての在り方を強調した。また東次郎師は「福の神」で用いた江戸時代の能面師・河内作とされる面を示し、照らす（上を向く）と曇らせる（下を向く）で表情が変わるさまを見せた。ユーモアを交えた東次郎師の語り口に、観客は奥深い狂言の世界に引き込まれたようだった。

最後に司会の学生から東次郎師に花束が贈られ、会場は大きな拍手に包まれた。

秋空の下、ホームカミングデー開催

相川七瀬さん、井上名誉教授が院友へ語る

国学院大学の院友（卒業生）が年に一度学び舎に戻る「ホームカミングデー」が10月13日、高く澄み渡る秋空の下、渋谷キャンパスで開かれた。院友の家族らも交え、大勢の来場者が多彩な催しを楽しんだ。

午前のオープニングセレモニーでは針本正行学長による開会のあいさつの後、院友会の今井亮副会長によって吉田茂穂会長の「ともに過ごす今日をきっかけに国学院愛をより大きなものに」というメッセージが代読された。

セレモニーに引き続き、神道文化学部を今春卒業し、院友となった歌手の相川七瀬さん（令6卒・132期神文）＝**写真上**＝により特別講演が行われた。相川さんは現在、本学大学院に進学して神道学・民俗学を専攻。講演では全国3カ所（長崎県対馬市、鹿児島県南種子町、岡山県総社市）の「赤米神事」という祭りに出合い、神道に根ざす日本文化を子どもたちに伝える取り組みをライフワークにした経緯が紹介された。

相川さんは「神道は日本人の暮らしから生まれた信仰であり、衣食住を含む文化を包括した精神、もっと言うと日本人の心だ」と述べ、それを伝えてきたのが祭りだったと強調した。神道の中心にある「共生」が生む幸福感はSDGsが掲げるウェルビーイング（肉体的、精神的、社会的に満たされた状態）にも重なると指摘。担い手不足で全国的に祭りの存続が難しくなっている中、人と人を結ぶ祭りの役割を見直すべきだと話した。

午後には、井上順孝名誉教授＝**同中**＝により「宗教文化を学んで日本を深め世界を拡げる」と題して特別講義が行われた。神社で七五三をし、教会で結婚式を挙げ、寺で葬式をしても不思議に思わないのは日本人の「宗教文化」だと井上名誉教授は説明。外国の宗教も同じく文化に深く根ざしており、食の戒律をはじめ規範や慣習を変えるのは難しいとして「訪日・在住外国人が増える中、いろんな宗教に触れることになる。その文化的背景や歴史を学び、他者理解に努めることがこれからはとても重要」と述べた。その後、西村幸夫・観光まちづくり学部長（教授）により、同学部の紹介が行われ、開設3年目となる学部の特色ある取り組みが写真を交えて院友に紹介された。

また構内では院友と交流する催しが目白押し。恒例の院友会支部物産展＝**同下**＝には北海道から沖縄まで9支部が参加。特産品を品定めする人でにぎわう傍ら、来場者が出店者の中に同級生を見つけ、再会を喜ぶ光景などが見られた。「過去と未来をつなぐ卒業アルバム展」に訪れた院友の男性（昭59卒）は「先輩の懐かしい顔が見たくて」とアルバムをめくった。散策しながら最新の学内情報を紹介する「大人のキャンパスツアー」に参加した女性院友（平19卒）は「当時は若木タワーが建ったばかりで、学術メディアセンターはなかった」と母校の進化に目を丸くするなど、思い思いに秋晴れの一日を満喫した。

国際交流歓迎会

交換留学生14人を歓迎

国際交流歓迎会が9月27日に渋谷キャンパスで開催され、在学生や教職員、留学生の異文化・地域交流を支援するフレンドシップファミリーなど、約90人が参加し、14人の交換留学生を歓迎した。

はじめに、田原裕子・国際交流推進部長（経済学部教授）が「皆さんの知識や経験を本学学生にも教えていただき、相互交流が深まる充実した留学になることを心から願っている」とあいさつ。交換留学生からの自己紹介の後、懇親を深めるために用意された質問ゲームが行われ、会場は笑顔に包まれていた。今後は、国際交流イベント「International Coffee Hour」などが定期的に開催され、留学生と在学生が交流を深めていく予定。

9月卒業・修了

学部50人、大学院３人

国学院大学の令和6年度9月卒業生・修了生が9月30日付で確定し、学部50人、大学院博士前期課程3人が卒業・修了を迎えた。

9月25日に渋谷キャンパスで行われた文学部卒業証書授与式では、矢部健太郎・文学部長（教授）＝**写真**＝が祝辞を述べ、卒業生一人一人に証書を手渡した。大学院9月修了学位記授与式も同日に渋谷キャンパスで行われ、佐藤長門・大学院委員長（文学部教授）から祝辞が述べられた。指導教員からは、これまでの努力がたたえられ今後の進路に向けてのエールが送られた。

卒業期は133期となり、学部の学位記授与式は令和7（2025）年3月23日に開催される予定。所属別の卒業生数は次の通り。

◎**大学院▶博士前期課程**◇文学研究科▷文学専攻1人◇法学研究科▷法律学専攻2人

◎**学部▶文学部**19人▷史学科3人▷日本文学科6人▷中国文学科1人▷外国語文化学科9人▶**経済学部**11人▷経済学科6人▷経済ネットワーキング学科2人▷経営学科3人▶**法学部**8人▷法律専攻7人▷政治専攻1人▶**神道文化学部**▷神道文化学科8人▶**人間開発学部**4人▷初等教育学科1人▷健康体育学科1人▷子ども支援学科2人

教職員人事

【退職】

◎**自己都合**

◆文学部◇教授▷小池寿子

◆大学事務局◇専任▷米山聡香（総務部人事課書記）

以上、令和6年9月30日付

【採用】

◆文学部◇教授▷三浦篤

以上、令和6年10月1日付

新任教職員紹介

10月1日付で着任した専任教職員のプロフィルを紹介する。丸数字は①略歴②抱負。

―― 文　学　部 ――

◆教授

三浦篤（みうら・あつし）

①東京大学大学院、パリ第4大学博士課程修了、東京大学大学院総合文化研究科教授を経て、現職。

②専門は西洋美術史（19世紀フランス絵画）、日仏美術交流史（ジャポニスム、日本近代洋画）です。美術作品を鑑賞し、研究する楽しさ、面白さを多くの学生に知ってもらいたい。何かに夢中になれば道が見えてきます。

経済学部生を体験する「E-Tour」を開催

経済学部の授業を疑似体験することができるイベント「E-Tour」が9月21日に渋谷キャンパスで開催され、約30人の高校生が参加した＝**写真**。

はじめに中田有祐・経済学部准教授があいさつし、経済学部の学びの特徴について説明。その後は、学生たちの進行で、経済学部生を疑似体験できるプログラムを実施。フリートークやキャンパスツアーを通して、学生目線のキャンパスライフを高校生に体験してもらった。

最後に行われた模擬授業では、アクティブラーニング型の授業を学生たちの進行で再現。参加者は「ペルソナ分析」と「行動の経済学」をテーマに、自ら考え、グループで答えを導き出す授業を体験した。本イベントは12月21日にも開催予定。

人間開発学会第16回大会を開催

国学院大学人間開発学会第16回大会が9月28日にたまプラーザキャンパスで開催された＝**写真**。

大会は4部構成で実施され、人間開発学部所属の教員・学生らが、人間開発学という理念を基に、教育学、健康・スポーツ科学、生命科学などの観点から研究発表や研究報告、成果報告を行った。最後に、前年度の機関誌『人間開発学研究』掲載論文において研究奨励賞を受賞した前田麦穂・同学部初等教育学科助教の表彰式と受賞者記念講演が行われ、第16回大会を締めくくった。

秋葉直樹名誉教授 逝去

国学院大学名誉教授の秋葉直樹氏が9月25日に逝去。89歳。

秋葉氏は昭和10年生まれ。34年国学院大学文学部卒業、36年同大学大学院日本文学研究科修士課程修了、39年同博士課程修了。文学修士。国学院大学栃木高等学校、国学院大学栃木短期大学勤務を経て、昭和47年国学院大学文学部助教授、56年教授、平成13年教授（特別専任）。18年定年退職、同年名誉教授。専門は近世文学、近代文学。在職中は文学部第二部長などを歴任した。

大和博幸名誉教授 逝去

国学院大学名誉教授の大和博幸氏が9月19日に逝去。75歳。

大和氏は昭和24年生まれ。46年国学院大学文学部卒業。文学士。国学院大学事務局勤務を経て、平成4年国学院大学文学部専任講師、6年助教授、14年教授。31年定年退職、同年名誉教授。専門は日本近世出版文化史・書誌学。著書に『江戸期の広域出版流通』（新典社）、共編書『近世地方出版の研究』（東京堂出版）など。

「指定寄付金」ご芳名

学校法人国学院大学では、私学としての公共性と独自性のある教育研究体制を確立するため、広くご寄付を募っています。

令和6年4月から9月まで、**別表**の通り、多方面の方々からご寄付を賜りました。ここに、ご芳名を掲載し、重ねて深甚の謝意を表します。

本法人に対するご寄付は、専用用紙による申し込みとインターネット上でクレジットカード決済による申し込みが可能です。詳細は**6面**をご参照ください。（総務部総務課）

令和6年度 指定寄付者一覧（敬称略）

令和6年4月1日～9月30日（単位：円）

寄付者	寄付目的	寄付金額	収納日
臼杵　千枝子	学生・生徒等の活動支援（硬式野球部、陸上競技部）	200,000	令和6年4月 9日
東京都神社庁　庁長　小野　貴嗣	施設・設備充実支援（神職養成の事務機器等購入費）	350,000	令和6年4月10日
宇都木　丈夫	教育・研究振興支援	30,000	令和6年4月10日
匿名	学生・生徒等の活動支援（国学院大学久我山中学高等学校）	3,000	令和6年4月16日
		3,000	令和6年5月16日
		3,000	令和6年6月12日
		3,000	令和6年7月16日
		3,000	令和6年8月14日
		3,000	令和6年9月20日
清水　理江子	学生・生徒等の奨学基金	5,000	令和6年4月22日
		5,000	令和6年5月22日
		5,000	令和6年6月24日
		5,000	令和6年7月23日
		5,000	令和6年8月22日
		5,000	令和6年9月25日
關橋　淳	学生・生徒等の活動支援（硬式野球部）	1,500	令和6年4月22日
		1,500	令和6年5月22日
		1,500	令和6年6月24日
		1,500	令和6年7月23日
		1,500	令和6年9月25日
石井　啓隆	学生・生徒等の活動支援（硬式野球部）	5,000	令和6年5月 9日
	施設・設備充実支援	10,000	令和6年5月 9日
長谷山　敏博	学生・生徒等の活動支援（国学院大学久我山高等学校ラグビーフットボール部）	10,000	令和6年5月22日
矢澤　敏司	学生・生徒等の奨学基金	10,000	令和6年5月22日
わかみこ会　代表　湊　明	学生・生徒等の奨学基金	50,000	令和6年5月30日
一般財団法人国学院大学院友会 会長　吉田　茂穂	学生・生徒等の活動支援（第28回全国高校生創作コンテスト）	100,000	令和6年5月31日
	学生・生徒等の活動支援（第20回地域の伝承文化に学ぶコンテスト）	100,000	令和6年5月31日
	教育・研究振興支援（学術スポーツ振興資金）	100,000	令和6年5月31日
	学生・生徒等の奨学基金	50,000	令和6年6月 7日
	学生・生徒等の奨学基金	1,000,000	令和6年6月28日
初鹿　博雄	施設・設備充実支援（神殿造替工事）	10,000	令和6年6月 1日
高橋　真人	学生・生徒等の活動支援（ラグビーフットボール部）	120,000	令和6年6月 7日
		120,000	令和6年6月24日
伊藤　直記	学生・生徒等の活動支援（陸上競技部）	20,000	令和6年6月 7日
		10,000	令和6年6月24日
		10,000	令和6年6月24日
宮永　一美	教育・研究振興支援（神道文化学部）	100,000	令和6年6月14日
喜多山　健二	学生・生徒等の奨学基金	100,000	令和6年6月24日
山本　周典	学生・生徒等の奨学基金	5,000	令和6年6月24日
高橋　理沙	学生・生徒等の活動支援（陸上競技部）	30,000	令和6年6月24日
遠藤　洋之	学生・生徒等の奨学基金	30,000	令和6年6月24日
有限会社ミナト工業所　代表取締役　石田　裕之	学生・生徒等の奨学基金	1,000,000	令和6年7月 5日
牧内　りずむ	学生・生徒等の奨学基金	5,000	令和6年7月 8日
百瀬　渡、百瀬　韶子	教育・研究振興支援（古典文学、国語学、中世歌謡、民俗学）	1,000,000	令和6年7月11日
匿名	学生・生徒等の活動支援（硬式野球部、陸上競技部）	300,000	令和6年7月29日
株式会社アローズ・ケイ・渋谷　代表取締役　城所　俊哉	学生・生徒等の奨学基金	65,000,000	令和6年7月31日
千葉　真弓	教育・研究振興支援	5,000	令和6年8月 7日
神社本庁総合研究所　所長　田中　恆清	教育・研究振興支援（研究開発推進センター事業）	300,000	令和6年8月15日
株式会社アルク　代表取締役　實川　利光	学生・生徒等の奨学基金	60,000	令和6年8月20日
昱株式会社　代表取締役　中川　崇	学生・生徒等の活動支援（陸上競技部）	50,000	令和6年8月26日
株式会社エデュース　代表取締役社長　松本　雄一郎	学生・生徒等の奨学基金	1,300,000	令和6年8月30日
九國会　会長　佐久間　進	学生・生徒等の活動支援（剣道部）	100,000	令和6年9月20日
荒井　康一郎	学生・生徒等の活動支援（バスケットボール部）	5,000	令和6年9月25日

学問ノ道 第63回

『國學院雑誌』創刊の頃の筆陣

明治27（1894）年の創刊当初の『國學院雑誌』の誌面は、国史・国文にかかわる手堅い議論弁説を掲載する［論説］、新生面ある思想に基づいた学説を開陳する［講述］、和漢英の名文の批評と解釈の［評釈］、国史・国文、国体についての論説・考証、諸種の解題を設けた［雑録］、教育従事者らの質疑と答弁の［応問］、学界動向や新聞報道の議論、新刊情報を載せた［彙報］、全国から寄せられた和歌文章と新体歌を紹介する［詞林］などで構成されていた。

このうち、いわゆる署名原稿は［論説］［講述］［評釈］［雑録］で、その執筆者の多くは当時の国学院関係者―とくに教鞭を執った人たち―であった。ここからは明治20年代後半における国学院の学問的雰囲気の一斑を窺うことができよう。

東京帝国大学 法・文科大学（絵葉書資料館蔵）

例えば、明治27年11月から28年10月にいたる第1巻の執筆者は全12冊で23名におよび、執筆回数としては国学者・国語学者として著名な物集高見や教育学関連の湯本武比古の掲載数が群を抜いて多く、次に小説家坪内雄蔵（逍遙）の英文にかんする［評釈］連載が続くものの、それ以外にも国学者にして日本史にも通暁した小中村清矩、国史学・国文学の萩野由之、宣長の曽孫にして国学者の本居豊穎、本邦有職故実の草分け関根正直、古典学の提唱者小中村義象、歌人にして国文学者の落合直文、有職故実の松本愛重らはそれぞれ複数回にわたり筆を執っている。また第1巻中では一度の寄稿ながら国学者今泉定助、さらに後期水戸学の史学者で栗田寛、［評釈］で漢文を連載で講じた川田剛らもいた。その他、坂正臣・杉浦重剛・芳賀矢一・三上参次らのちに国学院の教学運営の支柱となった人物の姿もみえる。

ここで注目したいのは物集、両小中村、萩野、本居、関根、落合、松本、今泉らの存在で、かれらには旧東京大学附属古典講習科に由縁をもつという共通点を指摘できることである。

古典講習科は、明治維新以降、和漢書研究者らがしだいにアカデミアにおける立ち位置を失いつつあった状況に学問的後継者難を予見した加藤弘之同大総理が、その育成機関として明治15年に設置した。

同科は6年余の短期で廃止となったが、創刊当初の『國學院雑誌』の筆陣はまさにかつて古典講習科で教鞭を執り、またその講筵（こうえん）に列した人びとによって彩られていた。折しも、この頃、国学者界隈においては学会の組織や結社の結成をみ、各種研究雑誌（本学における『日本文学』『皇典講究所講演』など）の刊行がすすんでいた。

すなわち、創刊当初の『國學院雑誌』の筆陣からは、翻って明治20年代後半の国学院がこれら和漢書研究者らの受け皿的存在となっていたという実態を窺うことができるのである。

研究開発推進機構助教 比企貴之

研究者に聞く

なぜ日本の中小宿泊業の労働生産性が上がらないのか？

観光まちづくり学部・井門隆夫教授

中小宿泊業の価値と労働生産性

現在、日本の宿泊業（法人）全体の94％が、資本金5000万円未満の中小企業です。さらには、宿泊業全体の60％を占めるのが、資本金1000万円未満の小規模旅館業です。私が着目しているのは、そうした宿泊業の労働生産性＝従業員1人あたりの付加価値です。

ここでいう付加価値とは、人件費や営業利益、租税公課などの合計なのですが、中小の宿泊業においてはその労働生産性が平成5（1993）年を境に下落していきました。一方、資本金5000万円以上の大企業は労働生産性を伸ばしつづけています。

地方の小規模旅館業では、もはや従業員を募集しても人がやって来ないということも珍しくありません。さまざまな国からの外国人労働者の力を頼ってきましたが、来日される方々の出身国の移り変わりも激しく、いつまでやって来てくれるのか……というのが正直な状況です。根本的に労働生産性を上げなければ、国内外を問わず、働く人がいない産業になっていってしまうのではないかと危惧しています。

もちろん、それはそれで仕方ないじゃないか、そもそも日本では生産年齢人口（15～64歳）が減少しているのだから、労働生産性の高い産業にシフトしていけばいいのではないか、という議論もあるかもしれません。しかし、中小の宿泊業というものは、そのように一概に切り捨てていいものではありません。なぜならば、そうした宿は、地方社会における〝ハブ〟（中核）を担っているからです。

例えばですが、地域の水源となっている保安林に実際に手を入れているのは、地元の方々です。里山として整備しているわけですが、そうした地域の中で、中小の宿泊業は、里山のキノコや山菜を採り、宿泊するお客様に提供したり、加工して商品として売ったりしながら、クマやイノシシ、シカといった動物たちと人の暮らしの間のバッファゾーンとしての里山の姿を保ってきた、という側面があるんですね。

そうした地域の宿泊業が地方から消滅してしまっては、里山が、いや地方全体が荒れ果てていく危険性は高まってしまうと、当の業者の方々も問題意識を持っているんです。つまり、中小の宿泊業は、地域の社会資本でもあるということなのです。

資本（所有）と運営が分離されない歪（ゆが）み

では、なぜ日本の中小宿泊業では労働生産性が上がらないのか。その大きな問題点の一つが、「資本（所有）」と「運営」が分離していない、ということです。

宿の運営にあたって、小さな資本しか持っていないのに、大きな借り入れをしているというケースが、日本では多く見られます。そうした場合には法人として大きな担保がなければならないはずなのに、小資本の宿泊業になぜそんなことが可能なのか。

それは、日本には個人保証制度があるからです。中小企業が金融機関から融資を受けるとき、経営者が連帯保証人になることができる制度でして、中小の宿泊業はこの制度の中で経営者の個人保証、そして不動産を担保に借り入れをして、経営を行ってきました。

つまり、旅館などの経営者は、法人が借りている金額と近い額を、個人の金融資産で保証しなければならない、というわけです。

ここで、歪みが生まれていきます。法人は赤字でも個人資産は黒字にしておかなくてはならなくなるのです。融資する金融機関としても、担保である個人資産が黒字ならばバランスが取れている格好となります。

しかしそれは、法人における多額の役員報酬や経営者への不動産賃料といったものが発生しやすくなる、ということを意味する。支えていきたい宿泊業に対してはあまり良い例の出し方ではありませんが、例えば法人としては赤字である旅館の社長が高級外車に乗っている、というケースさえ見受けられるのは、あれは担保だから、ということもあるのです。

しかもこうした歪みは、現場を疲弊させていきます。従業員の人件費や営業利益を圧迫しやすく、つまりは労働生産性が低く抑えられてしまう構造的な要因があるのです。

長期的な低迷に陥っている中小宿泊業の現状を変えていくには、一つにはこのように一緒くたになっている「資本（所有）」と「運営」を、分離させていく必要があります。

実際に労働生産性を伸長させてきた大企業の中には、資本に関しては外資系の巨大金融グループと提携し、その上で運営を担って全国展開し、成功してきた法人があります。ここで言いたいのは、外資の導入を巡る是非ということではなく、生産性を向上させる構造をつくっていくべきだということです。

ただ、個人保証制度を巡っては近年徐々に改革が進んでいるものの、なにぶん民法改正に伴うルールの変更をしていく領域ですから、一朝一夕に全てを変えていくという話にはなかなかなりません。

データから宿の事業再生の道筋を探る

日本の中小宿泊業に注力していくようになったのは、もともと私が旅行会社に勤めていた経験が大きく影響しています。大学卒業後、入社したのは昭和60（1985）年のことです。資本金5000万円未満の中小宿泊業の労働生産性が平成5年から下がっていったという話をしましたが、その頃の私は国内旅行部という部署に所属しており、まさにその実態を目の当たりにしていました。

ちょうどバブル崩壊の最中でした。その後、日本経済が「失われた30年」などと言われることになるとは思わず、いつか持ち直すだろうと信じながらも、一向に好転することのない状況に向かい合っていきました。

旅行会社が価格を下げようとするために、宿泊業者の方々にもどうしてもしわ寄せがいってしまうということになっていきました。すると、宿の方々から「もっと私たちの〝価値〟を売ってほしい」という声が届くようになったのです。

今のように、宿の利用者やインターネットのユーザーが自由にレビューや評価を書き込むような時代が来るはるか前、これからインターネットが普及していく、という時期のことでした。勤めていた旅行会社では、旅館に泊まったお客様のアンケート調査を集計、データとして蓄積しながら、単に価格の安さだけを重視するのではなく、きちんとお客様の満足度の高いお宿を紹介していこう、というような地道な取り組みが行われるようになっていきました。

私としても、価格と満足度の因果関係などをデータから考えるような取り組みを進めていたところ、いくつかの宿やホテルからコンサルティングをしてくれないか、というお声がけをいただくようになりました。それが発端となり、社内起業をしてアンケート分析の専門企業をつくり、やがてそれは研究所として発展していくことになります。そうした会社員としての業務とともに、大学の客員教授もさせていただき、現在の研究者としての道につながってきたということなのです。

2000年代に入り、不良債権化した旅館の事業再生、というようなことにも取り組んできました。全国津々浦々の宿を調査し、事業再生のための計画書をつくる、というような仕事を重ねていったのです。

新しい宿泊業のかたちを模索する

中小宿泊業における「資本（所有）」と「運営」の分離、という課題にいきあたっていったのも、こうした現場での経験あってのことです。とはいえ、「資本（所有）」と「運営」を巡る民法上の制度改革に、すぐさま全てを託すというわけにもいきません。中小宿泊業を再生するための方法を、さまざまに探っていく必要があります。

実はそのヒントも、旅館の事業再生に取り組むような日々の中で見つかっていきました。日本のバブル崩壊を他山の石としていたはずの世界経済もまた、平成20（2008）年のリーマン・ショック以降、多大な影響を受けていきました。そうした中、特に欧米が着目していったのが、短期的にキャピタルゲインを得るような資本主義のかたちではない、持続可能（サステナブル）な経済のかたちでした。

例えば、サステナブル投資の手法の一つとして、近年注目を浴びているのが環境（Environment）・社会（Social）・ガバナンス（Governance）の頭文字をとったESG投資です。上記の3要素に着目した投資であり、同時に財務的なリターンを求め、KPIをマイルストーンとして指標化しています。

サステナブル投資のもう一つの手法として、インパクト投資と呼ばれるものがあります。ここで注目されている「社会的インパクト」というのは、活動や投資を通じて社会や環境に与えていく変化のことを指しているのですが、インパクト投資とは、財務的リターンを求め、地域社会の維持・再生を目的としていく投資のかたちです。実際に、環境や社会面にポジティブなインパクトを与え、逆にネガティブなインパクトを抑えていく企業活動へ向けた「ポジティブ・インパクト・ファイナンス」といった融資を、銀行が行うようになっています。

日本の中小の宿泊業にとっても、こうした社会的インパクトを中心的な価値とした事業の在り方を、大いに発展させるべきだと私は考えています。海外においては富裕層を宿泊者として想定し、地域の自然環境の保護や、雇用を含めた地域社会への貢献などを目的とした、新エコロジッと呼ぶべき実践例もあります。日本でも、いろいろなかたちを模索しうるはずです。

例えば令和3（2021）年、島根県沖・隠岐諸島の海士町にオープンしたのが、「Entō」です。隠岐ユネスコ世界ジオパークに指定された地に「泊まれる拠点施設」として、注目を浴びています。「Entō」は文字通り〝遠島〟、古くから遠流＝島流しの地とされてきた場所において、むしろその「遠さ」にこそ価値を定めて、豊かな自然や生態系を体感できる施設をつくったのです。

建築資材としての木材や、宿泊者向けの食材の調達も、地元を重視して行われています。また移住者が多い土地でもあるのですが、海士町複業協同組合が「AMU WORK」という取り組みをしています。「AMU WORKER」と呼ばれる職員になると、例えば夏場は宿泊業、冬は漁業といったように、季節に応じて組織横断的に、人手の足りないところで働くことができるというわけです。「島留学」という制度もありますし、さまざまなかたちで人々の還流を起こしていって、持続可能な島の社会を築くべく、多くの取り組みが行われているんです。私のゼミの学生も、夏にはみんなで隠岐を訪れています。

宿泊業というのは社会資本です。だからこそ、社会に対してさまざまな貢献の仕方ができるはずだ。私自身もそうした実験の場に参加しながら、中小の宿泊業の未来を、考えていきたいと思います。

いかど・たかお
文学士（社会学・社会福祉学関係）。専門は観光イノベーション、宿泊業経営研究、観光・ツーリズム。主な著書に、『地域観光事業のススメ方 - 観光立国実現に向けた処方箋』（2017年、大学教育出版）、共著書・高崎経済大学地域政策学部観光政策学科編『大学的群馬ガイド: こだわりの歩き方』（2024年、昭和堂）など。

特別インタビュー Special Interview

パリ・オリンピック柔道日本代表に川上コーチが同行

日本代表から得た貴重な学び

今夏のパリ・オリンピックに国学院大学柔道部の川上智弘コーチ（平24卒・120期法、本学専任職員）が柔道男子日本代表のサポートメンバーとして参加した。川上コーチは令和３（２０２１）年から全日本柔道連盟（全柔連）の男子ジュニアコーチを務める。初のオリンピック同行という貴重な経験を生かし、「柔道部からオリンピックの代表を輩出したい」と意気込みを語った。

パリ・オリンピックの柔道男子のメダル獲得は金２個、銀１個、銅２個と東京オリンピックの金５個には及ばないものの、メダル総数では３年前と同じ５個を獲得。「東京のようにはいかないのは初めから分かっていた。柔道大国フランスでの開催という非常にアウェーな状況で、どの選手も全力を出し切った結果なので良かった」と川上コーチは代表選手の健闘を評価する。現地では選手や練習パートナーの世話をしたり、自ら練習相手を務めたりするなど、選手が１００％の準備で試合に臨める環境作りに気を配った。

川上コーチは平成20（２００８）年に国学院大学に入学。柔道部では１年次から頭角を現す存在だった。卒業して本学職員となった24年、ロンドン・オリンピックの出場権が懸かる全日本選抜柔道体重別選手権大会の決勝で敗れ、惜しくもオリンピックの切符を逃した。それからというもの、川上コーチにはオリンピックの代表選手が異次元の存在に映ったという。「決勝の舞台に一人で立って自分の力を出せるのは究極のメンタル。『勝ちたい』ではなく『勝つ』とイメージし、勝つための準備ができているのが本当に素晴らしい。本学からオリンピックの選手を出すには早いうちからもっと高い意識づけをするのが大事だ」と決意する。

今年５月にアブダビ（アラブ首長国連邦）で開催された世界選手権大会で院友の武岡毅選手（令４卒・130期日文、パーク24）が66kg級で２位となった。本学柔道部躍進の期待は高まる一方だが、川上コーチは「あと一歩のところが超えられない。今年の無差別団体戦（全日本学生柔道優勝大会）でも初のベスト４が見えたが、中央大学に代表戦で敗れた。振り返ってみると私自身も、勝ったらロンドンという試合で負けた。パリ・オリンピック66kg級金メダルの阿部一二三選手らを見ていると壁を突き抜ける自分の芯があるように感じる。私も学生と一緒に試行錯誤している」と話す。

本学柔道部は部員約40人と他の強豪校と比べて小所帯だが、質の高い練習には定評がある。それには川上コーチ自身の存在も大きい。全柔連コーチとして海外遠征で得た新しい技の情報など、世界柔道の最前線を学生にいち早く伝えられる。「部を離れて学生に迷惑をかけることが多い分、経験というお土産を持って帰れるようにしている。全柔連の活動も大学や部の理解がないとできないことなので感謝している。その恩返しがしたい。また、けがからの復帰を願い、リハビリをしている仲間もいる。そういった関係者にも良い報告をすることが使命」と力強く語っていた。

インフォダイジェスト

…在学生　…保証人　…卒業生　…一般　…受験生

内内容　日日にち　時時間　場場所　対対象　定定員　料料金　申申し込み　問問い合わせ

大学からのお知らせ

令和6年度学費等納付金について

内令和6年度学費等納付金（後期）口座振替日は、11月26日㈫です。詳細は、10月下旬に発送した「学費等納付金納入のお願い」や大学HPをご確認ください。

問経理課、学生生活課、たまプラーザ事務課、大学院事務課

「指定寄付金」ご協力のお願い

内学校法人国学院大学では、私学としての公共性と独自性のある教育研究体制を確立するため、広くご寄付を募っています。寄付の種類は、「学生・生徒等の奨学基金」「学生・生徒等の活動支援」「教育・研究振興支援」「施設・設備充実支援」の四つに加え、学生の課外活動を支援するための「課外活動支援（スポーツ強化部会など）」や「メッセージ募金」を設けています。「メッセージ募金」は、スポーツ活動や課外活動などに熱心に取り組む学生に向けて、HP上からメッセージを直接投稿してもらう仕組み。ワンコイン（500円）から寄付が可能で、メッセージはそのまま専用HPに公開されます（匿名可）。

申専用用紙またはインターネットでのクレジットカード決済が可能です。

問総務課（☎03・5466・0111）

※本法人への指定寄付金は税制上の優遇措置を受けることができます。募金に関する情報は専用HP（**二次元コード**）で閲覧できます。

法学会学生懸賞論文を募集

内法学部生を対象に、法律学・政治学に関するテーマで懸賞論文を募集します。優秀な論文は表彰を行い「懸賞論文入選集」に掲載します。併せて副賞（最優秀賞：図書カード10万円分、優秀賞：同５万円分、佳作：同3万円分）を贈ります。

申令和7年1月20日㈪午後3時までに論文（A4サイズ40字×30行の横書き。脚注含め10～40枚）と受付票、論文概要をWord形式で作成し、法学会懸賞論文窓口にメールで提出。詳細は本学HP（**二次元コード**）で確認を。

問法学会懸賞論文窓口（✉law-kensyo@kokugakuin.ac.jp）

イベント

令和6年度 オンライン公開講座「渋谷学２　渋谷をめぐる―渋谷とその隣接エリアから考える」

内渋谷駅周辺には、異なる魅力を持ったエリアが数多くあります。現在ではこうした地域も含めて「渋谷」として捉えることも増えてきました。それでは、なぜ、渋谷とその隣接エリアは一体として把握されるようになったのでしょうか。また、各エリアはどのように形成されて今に至るのでしょうか。本講義では、その点を「渋谷学」の成果から論じます。

※視聴にはパソコン・スマートフォンなどの端末とインターネットに接続できる環境が必要です。

日配信中～11月30日㈯

料6000円（全4回）

申11月24日㈰まで。専用HP（**二次元コード**）から申し込み

問エクステンションセンター（☎03・5466・0270、✉jigyou@kokugakuin.ac.jp）

キャリアサポート

※詳細確認・申し込みはK-SMAPYⅡから行ってください

大手優良企業が多数参加「企業セミナー」

内各業界のリーディングカンパニーの採用担当者が業界や企業の説明をします。この機会に志望する企業や業界への理解を深めましょう。志望業界が定まっていない人は、まず企業の話を聞いて興味・関心の幅を広げていきましょう。

日開催中～10月31日㈭の平日のみ、11月6日㈬

対学部1～3年生、院1年生

内定者アドバイザー相談制度がスタート

内就職活動を終えた4年生が、最新の情報と自らの経験を基にアドバイスを行います。どのように就職活動を進めていったのか、志望する業界・企業をどのような考えで決めていったのかなど、下級生の皆さんに参考となる生の声を聞くことができます。民間・公務員にかかわらず就職に関わる疑問を相談してみましょう。

日月～金曜（大学休講日を除く）

時14～18時

対1～3年生

場キャリアサポート課窓口

日本語の魅力を伝える日本語教師を目指す

宮﨑柚華さん（日文4）

宮﨑柚華さんは、中国語をマスターしようと、1年間休学して台湾に留学。そこで出会った先生の影響で、日本語教師が将来の夢になる。「日本語パートナー」とボランティアで奮闘する日々や、言語を学び教える魅力について話を伺った。

高校時代、古文の授業で源氏物語に興味を持った宮﨑さん。古文を学ぶなら国学院大学でと、北海道短期大学部を経て日本文学科3年生に編入した。源氏物語の研究を続ける傍ら、第2言語で履修した中国語の面白さも実感した。在学中に習得しようと、1年間休学して台湾へ留学。そこには、これまで考えすぎて一歩を踏み出せずにきた性格を変えたいという願いもあったという。語学学校の選択からアパートの手配など、あらゆる手続きを自力でこなし、さらにレベルアップを目指してシェアハウスへの転居や転校も経験。転校した先で、良い先生との出会いがあった。

「クラスの授業の中では、一人一人のレベルに合ったアドバイスをくださったり、テキスト以外のお話の中にその日に学んだ文法や言い回しを盛り込んでくれたり……。先生との自然な会話を通して語学力が伸びました。言語を学ぶ楽しさと同時に教える素晴らしさにも触れ、日本語教師になりたいという夢が明確になりました」

帰国後、日本語教師について相談に乗ってもらおうと学内各所を回る中で、国際交流課を知る。そこで日本語教師に近づくための具体的な行動のアドバイスをもらい、その一つとして交換留学生のサポートをするK-STEPアシスタントへの登録を勧められる。そして「日本語パートナー」として、アメリカからの留学生に毎週2回日本語レッスンをするようになった。宮﨑さんは想定問答集を作成するなど、レッスン前の準備にじっくり時間をかけている。

「予想もできない質問もあるので、慌てないように備えておきたいのです。留学中に、伝えたいニュアンスが文法に影響することを実感し、文化や習慣が表れることが面白いと感じました。日本語の発話や文章には背景があるように思い、その言葉や文法が使われる場面や相手を明確にして教えるようにしています。無意識に使っている表現を言語化して教えることも大変ですが、それが文法だけで解決できないこともあるし、さらに個人差や地域差があるものの場合は私個人の感覚だけでは駄目ですし。いったん答えはするものの持ち帰って調べ直すこともしばしばです」

7月からは、居住地で日本語を教えるボランティアにも参加。ここでは発話や板書など授業の構成を考える教案も作成する。大学の先生方に教え方などの指導を受けて授業に臨むのだが、現場は想定外のことばかりだと笑う。しかし、宮﨑さんはその一つ一つが経験として蓄積され、夢を実現するための力になると実感している。

「話せる言語が一つ増えるだけで、交流できる人や見えるものが増えていく。私が感じている言語を学ぶ楽しさ、そして日本語の面白さを伝えられたらと思っています」

自分が成長できる場所が海外であれば、海外で教えたいと語る宮﨑さん。その瞳は、希望と自信で輝いている。

インタビューの詳細は「国学院大学メディア」で公開予定

TOPICS 国家資格「登録日本語教員」の資格取得に係る経過措置の適用について

本学の副専攻プログラム「日本語教育（日本語教員養成課程）」（以下、「日本語教育」とする）が文化庁の審査基準を満たし、国家資格「登録日本語教員」の経過措置対象課程として認定されました。従来、本学の「日本語教育」修了生は法務省の基準を満たし日本語教育機関で教員として勤務可能でしたが、令和11（2029）年4月1日以降は国家資格「登録日本語教員」を取得しなければなりません。平成29（2017）年度以降に入学した学生で「日本語教育」を修了した者は、1年間の現職経験があれば経過措置の対象となり、基礎試験の免除や実践研修の修了とみなされます。経過措置は令和11年3月31日まで適用されます（平成28年度以前の入学者は対象外）。詳しくは、本学HP＝**二次元コード**＝をご確認ください。

本件に関する問い合わせは、教務課までお願いします。

（**教務課☎03・5466・0135**）

ソフトテニス部

久保田・原ペア全国2連覇

寺澤・相原ペア3位、大学対抗戦女子3位

女子ダブルス2連覇の久保田・原ペア（左）と3位の寺澤・相原ペア（同部提供）

全日本学生ソフトテニス大会が9月10日から15日にかけて、沖縄県で開催された。国学院大学ソフトテニス部は、ダブルスで女子の久保田茜選手（日文4）・原千晴選手（中文4）ペアが優勝で２連覇、寺澤佑珠妃選手（日文3）・相原愛選手（中文1）ペアが3位となり、大学対抗戦においても女子が3位という好成績を収めた。

大学対抗戦で3位となった女子チーム（同部提供）

同大会は、大学対抗、ダブルス、シングルスの各選手権で構成される大学主要タイトル戦の一つ。ダブルス選手権は9月11、12日に開催され、同部女子からは13ペアが参加した。久保田選手・原選手ペア、寺澤選手・相原選手ペアともに安定したプレーで準々決勝まで突破。寺澤選手・相原選手ペアは準決勝で4月の全日本女子選抜を制した明治大学の前田選手・中谷選手ペアと対戦するも、力及ばず敗れ3位となった。久保田選手・原選手ペアは準決勝で日本体育大学ペアを破る勢いをみせた。迎えた決勝では、準決勝で寺澤選手・相原選手ペアを破った明治大学の前田選手・中谷選手ペアとの大一番に臨んだ。久保田選手・原選手ペアは一進一退の攻防を見せ、接戦を制し5-4と勝ち切り、全日本2連覇の栄光を手にした。

9月14、15日に開催された大学対抗選手権では、女子の部は、57大学が参加。同部女子は準々決勝までは全試合ストレート勝ちという堅実な試合運びで勝利を重ねていったが、立教大学との準決勝では2勝2敗となるも最終戦で勝ち抜くことができずに惜しくも敗れ3位となった。

K:DNA

2024 10

K:DNA ── 創立142年を迎えた国学院大学の遺伝子…個人・個性を尊重する校風　若いエネルギーが未来を変える

陸上競技部

出雲駅伝　平林主将がアンカー勝負制し 5年ぶり2度目の優勝

1位でゴールテープを切る平林主将（写真・月刊陸上競技）

大学駅伝シーズンの開幕戦となる第36回出雲全日本大学選抜駅伝競走が10月14日、出雲大社（島根県出雲市）正面鳥居前から出雲ドーム前を結ぶ全6区間45.1kmのコースで開催され、国学院大学陸上競技部は5年ぶり2度目の優勝を飾った。

気温28度を超える中、選手たちは出雲路を懸命に駆け抜けた。1区では青木瑠郁選手（健体3）がスタート直後から勢い良く飛び出し、ライバル校の青山学院大学の選手と競り合いながら、1位と8秒差の3位で2区の山本歩夢選手（健体4）にたすきを渡した。2区では創価大学の選手が2km過ぎから一気に順位をあげていく中、山本選手は懸命に食らいつき、5位で3区の辻原輝選手（史2）に後を託した。辻原選手はトップの創価大学を追いかける2位集団で上位を狙い、6km付近でアイビーリーグ選抜（米国）と創価大学を追い抜き、3位で野中恒亨選手（健体2）にたすきをリレーした。

4区の野中選手は単独走で首位を争う青山学院大学と駒沢大学を追いかけ、トップ2校との差を区間賞の走りで縮めた。5区の上原琉翔選手（健体3）は堅実な走りで、首位争いをしていた2校を5km付近で捉え、そのまま1位に躍り出た。駒沢大学の選手に猛追を受けたものの、残り1kmを切ったところから引き離し、1位で2年連続アンカーの平林清澄主将（経営4）につないだ。

最終6区で平林主将は、4秒差でスタートした駒沢大学の選手に一時並ばれるも、上りに差し掛かると徐々に差をつけ、残り2kmあたりでは独走態勢を構築。最終的には区間賞の走りで2位と40秒もの大差をつけ、2時間9分24秒で5年ぶり2度目の出雲駅伝優勝を果たした。

優勝にあたって平林主将は「自分が入学前に憧れた出雲駅伝で、もう一度優勝を再現しようと精いっぱい走った。みんなの勢いを借りて優勝することができた」と語った。前田康弘監督も「優勝できたのは日ごろから支えてくれた皆さんの支援のおかげ。感謝したい。『オール国学院』の優勝だと思う」と出雲駅伝優勝を振り返った。

個人成績

区間	氏名	所属	タイム	区間順位	総合順位
1	青木　瑠郁	健体3	23分48秒	3位	3位
2	山本　歩夢	健体4	16分27秒	5位	5位
3	辻原　輝	史2	24分12秒	4位	3位
4	野中　恒亨	健体2	17分42秒	1位（区間賞）	3位
5	上原　琉翔	健体3	18分12秒	1位（区間賞）	1位
6	平林　清澄	経営4	29分3秒	1位（区間賞）	1位

総合成績（8位入賞まで）

順位	大学名	総合成績
1	国学院大学	2時間9分24秒
2	駒沢大学	2時間10分4秒
3	青山学院大学	2時間10分24秒
4	創価大学	2時間11分47秒
5	アイビーリーグ選抜	2時間12分18秒
6	早稲田大学	2時間12分23秒
7	城西大学	2時間12分34秒
8	帝京大学	2時間13分35秒

硬式野球部

同点の一打を放った石野選手

東都秋季リーグ 接戦の中、2位で終盤戦へ

東都大学野球1部秋季リーグは第4週までを終え、国学院大学硬式野球部は2位となり、最終第5週に臨む。

第2週で同部は亜細亜大学と対戦。9月25日の第1戦は0-1で迎えた七回裏に1死二塁のチャンスを作ると、リーグ戦初スタメンの石野蓮授選手（経営1）が右方向へタイムリーツーベースヒットを放ち同点に追いつく。その後内野ゴロの間に2点目を奪い逆転に成功する。投げては、當山渚投手（経営3）が相手打線を九回途中まで1点に抑える好投を見せ、2-1で勝利した。翌26日の第2戦は、投手陣が相手打線につかまり1-11で敗戦。勝ち点がかかる第3戦は10月15日に行われ、5-3で勝利した。

第3週では日本大学と対戦。10月1日に行われた第1戦では、二回裏に伊東光亮選手（経4）のタイムリーヒットで1-0とすると、五回裏にも2点を加え3-1で勝利。4日の第2戦は、一時勝ち越すも、延長十一回裏に逆転を許し、5-6で敗戦した。第3戦は17日に行われ、4-1で勝利し勝ち点を得た。

第4週では中央大学と対戦。9日の第1戦では1点が遠く、0-2で敗戦。10日の第2戦は、0-1で迎えた九回表に2死一、二塁のチャンスに途中出場の宮坂厚希選手（健体3）が逆転の一打を放ち、2-1で勝利した。11日の第3戦は、0-0の投手戦で迎えた四回表2死一、三塁のチャンスを作ると、柳舘憲吾選手（法4）の3ラン本塁打で先制。その後も追加点を挙げ6-1で勝利し、累計勝ち点3で第5週を迎える。

柔道部

全日本学生柔道体重別選手権 中村選手が3位、3選手が5位入賞

体重別の学生日本一を争う男子第43回・女子第40回全日本学生柔道体重別選手権大会が10月5、6日に日本武道館（東京都千代田区）で開催された。国学院大学柔道部からは予選を突破した男子10選手が出場し、男子90kg級で中村俊太選手（健体4）が3位となった。

中村選手は初戦で原田優大選手（愛知大学）相手に、小外刈りで一本勝ちを決めると勢いに乗り、続く山村洸斗選手（天理大学）との対戦でも内股の技ありを取り、優勢勝ちとなった。準々決勝の近藤那生樹選手（東海大学）との対戦では、両者一歩も譲らぬ攻防を繰り広げ、そのまま延長戦に突入。9分を超える激戦の中、大内刈りで技ありを決め勝利を収めた。準決勝の岡田陸選手（国士舘大学）との戦いでは延長戦までもつれ込み、果敢に攻めにいくも反則を累計3回取られ反則負けとなり、3位入賞となった。

同部からはほかにも、73kg級で阿久津友春選手（法4）と大塚遥人選手（神文4）が、90kg級で小林開道選手（法3）がそれぞれ5位入賞を果たした。

3位となった中村選手（同部提供）